



代表取締役会長

三須肇

HAJIME
MISU

代表取締役社長

三須麻衣子

MAIKO
MISU

理研オプテック
〔東京都品川区〕

「光を操る技術」でモノづくりの安全を守る

—— 御社は、保護メガネをはじめとする「現場作業向け保護具」と、「プレス機械向けの安全装置」という一見まったく異なる2つの事業を手がけていますね。

三須肇会長 じつはどちらも「光を操る技術」を基盤としている点は共通しているんです。戦前、理化学研究所系列の会社に勤務していた父・

三須倉太郎が、紫外線を吸収する特殊レンズの技術を継承し終戦後の復興に役立てようと、1950年に製造販売会社を設立したのが当社の始まりです。溶接現場などでは紫外線防護用のメガネが不可欠で、重厚長大産業の復興とともに、当社製品の需要も大いに伸びました。

転機が訪れたのは60年。当時取引のあった大手メーカーから、「プレス機械の事故を防ぐ効果的な安全装置がつかれないか」と持ちかけられたのです。そこで当社が培ってきた光を操るレンズ技術を応用し、光を遮ると機械が自動停止する光線式安全装置を国内で初めて開発。これが高く評価され、いまではプレス機用安全装置で国内シェアの60%以上を占めるまでになりました。

—— 経営者としての大きな試練は何でしたか。

会長 社長就任前はスポーツ関連などまったく別分野の新事業を模索した時期もありました。しかし90年の

社長就任直後にバブルが崩壊。製造業を顧客とする当社は大打撃を受け、大規模なリストラを余儀なくされるなど厳しい状況が続きました。そんな中で生き残っていくには、やはり原点に立ち返り、働く現場の安心・安全分野を深耕していく以外にないと思いついたのです。どんな業種でも顧客ニーズの把握は重要ですが、安全装置や保護具の場合、現場の声にどれだけ寄り添えるかが、働く人々の生命を守ることに直結します。だからこそ顧客との対話を重視し、プレス機向け安全装置は顧客ごとの製造ラインに合わせてカスタマイズし、稼働後のアフターフォローも徹底しました。保護具もできるかぎり顧客との対話を図り、最もふさわしい製品を開発・提案してきました。安心・安全に関するお客さまの悩みに真摯に寄り添い、着実に解決していく姿勢が当社の原点。これを社風として根付かせていくことに長年注力

してきました。

—— 今年8月に会長になられ、麻衣子さんが新社長に就任されました。

会長 製造現場の安全意識を一層浸透させていくためには、業界を挙げ

ての啓蒙・啓発が必要だと以前から強く感じていました。ちょうど娘の社長就任への決意も固まり、機が熟したと考えて会長職に就きました。今後は業界全体でモノづくりの安全確保に尽くしていく所存です。

—— 最後に新社長から、さらなる成長への抱負をお聞かせください。

三須麻衣子社長 国内では製造現場の高齢化が進んでいます。外国人の働き手もますます増えるでしょう。高齢になれば身体能力も衰えますし、日本語に不慣れな外国人への安全確保もハードルが高くなります。これ

までの提案力に磨きをかけ、労働環境の変化に対応した新しい発想の安全装置や保護具を生み出すことこそ、これからの私たちの使命であり、そこに大きな飛躍の可能性があると信じています。「IoT」（モノのインターネット）も力を入れていきたい分野です。当社のプレス機向け周辺装置にセンサーや通信技術を取り入

れることで、機械の稼働状況を詳しく把握できるようになります。故障の予兆を検出することができ、より高いレベルでの安心・安全の実現につながるはずですよ。

私は創業者の孫で、3代目の女性社長ですが、気負いはありません。大切にしたいのは「感謝」の気持ち。私という人間がいまここにあるのも、祖父と父が築き上げた実績と信頼のおかげであり、会社と社員にその恩返しをしたいという想いが強くあります。顧客の声に真摯に寄り添う社風を引き継ぎながら、社員が持てる能力をより発揮できるような環境をつくり、モノづくりの安心・安全と未来を守る会社としていつそう成長させていく覚悟です。

モノづくりの安心・安全を実現する会社として、65年以上にわたり、現場の声に寄り添いながら歩まれてきた企業様です。さらなる成長に向けた新製品の開発やIoTへの取り組みも、弊行も応援してまいります。



●銀行取引店
三菱東京UFJ銀行
品川駅前支社
支社長
小田卓也